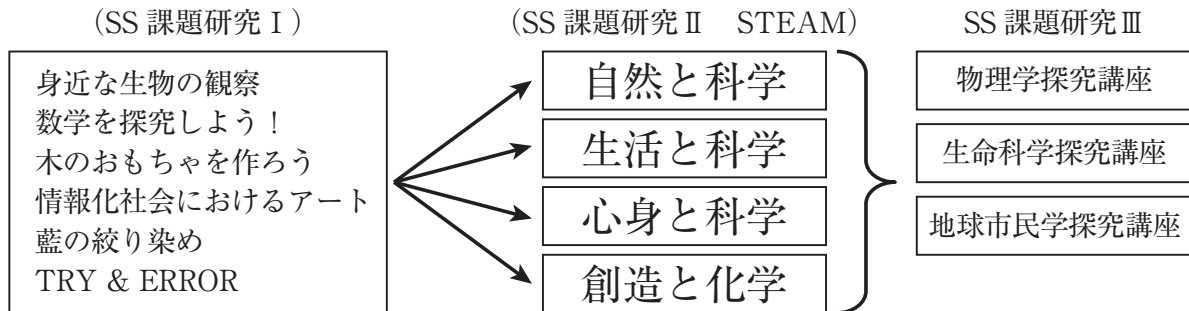


研究開発実施上の課題及び今後の研究開発の方向・成果の普及

三小田 博 昭

1 研究開発実施上の課題

(課題1) 中高6年間を通して行う第3期SSH課題研究の系統的な枠組の確立



H28年度は、SS課題研究 I、SS課題研究 II（高校1年生）、SS課題研究 IIIの枠組みを確立させ試行した。H29年度以降は、SS課題研究 II STEAM（高校2年生）での探究活動を行う。SS課題研究 II STEAM（高校2年生）は9名の教員が120名の生徒の課題研究を同時に担当する。実際の授業時間割にSTEAMをどのように落とし込むかといったテクニカルな問題点や120名の生徒をどのように9名の教員に割り振るのかといったカリキュラムマネジメントの問題点もある。また、研究成果を論文にまとめるのだが、授業時間内に論文を完成させるように指導する時間的な課題もある。

本校はH27年度からSGHを全校生徒対象に実施している。SGH課題研究とSSH課題研究が相関的に関わることで文理融合型の課題研究を行うことができ、研究内容がより深まる。SGH課題研究とSSH課題研究を効果的に一体化させる研究方法を次年度以降、試行錯誤して実践する。

(課題2) 協同的探究学習を学校カリキュラム全体へ拡大する取組の開始

第2期SSHでの成果を受け、H28年度は、文系教科や実技教科にも協同的探究学習を取り入れる試みを開始した。H28年度は、中学では社会、英語、国語、美術で試行した。H29年度以降は、高校のカリキュラムの文系教科・実技教科に協同的探究学習をどのように取り入れるかが課題である。また、SS課題研究 I・II・IIIに「協同的探究学習」を効果的に取り入れることも課題である。これまでSSH校として、既存教科の中で実践し、評価方

法を開発してきた「協同的探究学習」をSS課題研究の中に効果的に取り入れることができれば、既存の教科での学びを統合し、SS課題研究での探究をさらに深めることができるからである。また、逆にSS課題研究で行う「協同的探究学習」の成果が教科での学びに再び還元され、相互に作用しあうことで、螺旋的に生徒の主体的な学びが進化するとも考えることができる。

(課題3) 第3期SSH研究開発を評価するアンケート尺度の分析

H28年度は、「生徒の意識を測る調査」と「生徒の思考力を測る調査」に関して、新たなアンケート尺度と記述型課題を作成した。生徒につけさせたい4つの力を測るためアンケート調査（A《多様な既有知識を関連づけて、学習した内容と実生活を結び付けて考える力》、B《課題の本質を理解し、柔軟な思考の枠組みを創造する力》、C《自ら設定した課題について主体的に探究する力》、D《判断した根拠や因果関係について自分の考えで説明する力》の相関関係を求めること。

次に、生徒のSSH活動実績とABCDの力の関係や、GTECで測定した生徒の英語力との関係も捉えて行こうと考えている。可能ならばSGHで付けさせたい力との関係も測っていきたい。

また、3期SSHで、生徒の「思考過程を測る調査（本校の基準による、生徒の認知的側面の調査）」の記述型の評価課題を作成した。その課題を実際に試行することがH29年度の目標であり課題である。第3期SSHは、教科を統合した深い理解に関するコンピテンシーを測る課

題を作成したため、その分析を新たに作成した評価基準を用いて分析を開始する。

「生徒の意識を測る調査」と「生徒の思考力を測る調査」の相関関係を多面的に分析し第3期SSH研究開発の評価につなげたい。

(課題4) 卒業生に対する意識調査

本校でSSHを経験した世代は、現在、大学生・大学院

生・社会人として活躍している。本校の卒業生が名古屋大学に進学し、成績優秀者に贈られる総長顕彰を3年連続して受賞した。他大学に進学した卒業生も学部長表彰を受賞したり、卒業生総代となった。しかし把握している実態は全体の中のごく少数でしかない。本校SSH研究開発が卒業生に与えた影響を与えたのかを卒業生に調査することが課題である。またその方法を検討することも課題である。

2 成果の普及

H29年度 プログラム評価連携校との協議
SSHホームページの充実
SSH研究成果を報告書や紀要にまとめる

○名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要に成果をまとめ配布

<p>ISSN 0367-4761 Nagoya University Journal of Education 名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第61集・2016年12月</p> <p>目次</p> <p>第1部 スーパーサイエンスハイスクール (SSH) の取り組み</p> <p>1. 名古屋大学教育学部附属中・高等学校のSSHの取り組み 2. 名古屋大学教育学部附属高等学校のSSHの取り組み 3. 名古屋大学教育学部附属高等学校のSSHの取り組み</p> <p>第2部 実践的学習の推進</p> <p>1. 実践的学習の推進 2. 実践的学習の推進 3. 実践的学習の推進</p> <p>第3部 国際化の推進</p> <p>1. 国際化の推進 2. 国際化の推進 3. 国際化の推進</p> <p>第4部 研究開発の推進</p> <p>1. 研究開発の推進 2. 研究開発の推進 3. 研究開発の推進</p> <p>名古屋大学教育学部附属中・高等学校 編</p>	<p>BULLETIN OF NAGOYA UNIVERSITY SCHOOL OF EDUCATION AFFILIATED UPPER AND LOWER SECONDARY SCHOOL Volume 61</p> <p>CONTENTS</p> <p>1. Introduction to the SSH Program 2. The Bridge Between Affiliated Secondary Schools and Nagoya University</p> <p>3. Practice of Practical Learning (SSH) Program 4. General Outline of the SSH Program 5. General Outline of the SSH Program 6. General Outline of the SSH Program</p> <p>7. Internationalization 8. Internationalization 9. Internationalization</p> <p>10. Research and Development 11. Research and Development 12. Research and Development</p> <p>13. Empirical Study on Developing Problem Solving and Inquiry Learning 14. Student Research 15. Practice of Student Research</p> <p>16. Developing Science Literacy through Collaborative Inquiry Learning 17. General Outline of Collaborative Inquiry Learning 18. Practice of Student Research</p> <p>19. Internationalization 20. Research and Development</p> <p>Edited by Nagoya University School of Education Affiliated Upper and Lower Secondary School Nagoya, Japan December, 2016</p>
--	---

○学校祭・学校説明会・附属学校オープンキャンパスで一般来場者にSSH研究成果を発表

